

(2) 学校平均点の分布

種 別		平均点													計
		15～	20～	25～	30～	35～	40～	45～	50～	55～	60～	65～	70～	75～	
小学校	社会	1	5	6	5	3	2	4	2	—	—	1	1	—	30校
	理科	—	—	—	—	6	10	6	2	2	2	—	2	—	30校
中学校	社会	—	1	7	5	3	2	—	—	—	—	—	—	—	18校
	理科	—	—	—	1	5	3	3	1	—	—	—	—	—	18校

(3) 県平均点

項 目	学 校 区 分		中 学 校	
	小 学 校		社 会	理 科
県 平 均 点	40.3	50.1	34.6	43.4
学校単位 { 最高	71.5	79.3	43.2	51.9
平均点 { 最低	19.1	35.3	22.8	30.5

✓学力の測定には長さの測定における物指、重さの測定における秤りのような測定具がない。したがって一般には学力を測定しようとするれば、その測定しようとする対象の学力を予測し、平均点を中心にして平均以上、平均以下が共に長く裾をひいた形の数値で表われるように学力検査問題を作成するのである。

このことから文部省の全国学力調査問題の作成にあたっての態度を、今回の中間報告を通して見ると次のようである。

c. 調査結果の全国的な位置づけ

(i) 昭和32年, 35年度の社会・理科の成績

1表 昭和32年度と昭和35年度との出題方針の比較

	年度	教 科		昭 和 3 2 年 度	昭 和 3 5 年 度
		社 会	理 科		
小 学 校	社 会			全国平均50点を期待して出題	解答の許容範囲をせばめて、正確さをより強く要求した問題を作成し、採点方法においても、そのような方針をとり、32年度よりやや低い平均点を期待して出題
中 学 校	社 会			全国平均50点を期待して出題	若干むずかしくなり、全国平均50点を下廻ることを予期した。
					全国平均50点となるよう期待した。

以上のねらいをもって作成された全国学力調査問題に表われた、全国および本県の標本の成績は 2表のようである。

2表 答案に直接表われた成績

学校	小 学 校				中 学 校			
	社 会		理 科		社 会		理 科	
	全国	県	全国	県	全国	県	全国	県
32	55.7	48.6	51.3	45.4	55.7	49.6	49.5	44.1
35	45.5	40.3	51.7	50.1	41.2	34.6	47.7	43.4

この表から年度相互, 教科相互, 小学校と中学校相互の学力の差異について、何がいい得られるであろうか。2表にあらわれた数値を長さの例をとって極論すれば、幾つかの長さを比較しようとして、ある物はメートル尺で、あるものはヤード尺で、また他のあるものはそれぞれ曲尺で、鯨尺などで測った数値を持ちよったようなものである。従って 2表にある数値の大小を論することは意味のないことである。

前述せるように学力の絶対量を示す測定具が存在しないので、学力の評価の場合には相対的な測定値を用いる以外に方法はない。そこで今回は全国の平均と標準偏差とを基準にして全国平均を50点に、50点から左右への1点のへだたりの大きさを標準偏差の10分の1とした尺度を用いることにする。一学力偏差値一

このような尺度による年度別・教科別の数値は 3表のようである。

3表 全国を基準とした学力偏差値

年度	学校	小 学 校		中 学 校	
		社 会	理 科	社 会	理 科
32		46.8	46.6	47.4	46.4
35		48.1	47.5	46.6	47.2

—全国平均=50, 標準偏差=10
とした場合の本県の成績—

3表に示した数値のもとでは、年度, 学年, 教科相互の比較が可能となるので、これらの点について考察を試